

優秀賞(臨床工学技士部門) 西岡 宏

サンマの渡航移植

大切な思い出となったお話をご紹介します
 したいと思います。私は臨床工学技士として補助人工心臓(VAD)に携わっています。心臓移植を目標としてVADを装着し、平均約3年半といった長い待機期間を過ごす重症心不全の患者様のサポートをします。現在のVADは装着後も自宅療養することができ、QOL(クオリティ・オブ・ライフ/生活の質)も向上していますが、小児に関してはドナーが非常に少なく渡航移植を希望される方がいらつしゃいます。



今回のお話はその一人、拡張型心筋症と診断された10才の女兒との思い出です。彼女も当院にてVADを装着し、渡航移植の方針となりました。渡航の際の私の仕事は飛行機移動による気温や気圧の変化に対して変動する本人のバイタルに合わせてVAD駆動を管理する事です。

普段院内で私他の方からいただいたサンマのストラップをPHS(携帯電話の一種)につけていたので(それがいいかどうかは別として)、その子やご家族から「サンマのお兄ちゃん」と呼ばれていました。移植が決まり彼女を米国へと無事搬送し、知らない国で残される不安そうな女兒に対し「他に出来ることはないかな?」と思いつきでそのサンマを「お守りにしてね。」と手渡し、私は日本へ帰国しました。

数か月後、通常業務をしているところにその子が現れました。無事移植を終え帰国し、検査のため入院しているとのことです。元気いっぱいの笑顔で「はい、これ!」とお守りであつたサンマを返してくれました。思いがけない出来事に女兒の移植成功を嬉しく思うと同時に「ああ、こういう仕事ができる本当によかった。これがあるから頑張れるのだ。」と大切なことに気付かされました。いつのまにか私は仕事というものに慣れてしまっていました。考えられないような苦労と努力と協力が重なって成される心臓移植、知らず知らずのうちに業務をこなすだけになっていたので。「忘れていた初心とやりがい」を思い出させてくれたサンマは今でも私のPHSに付いています。

